

AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

看護研究集録(2016.10) 平成27年度:72.

先取り介入の推進による患者特性「高次機能・感覚系障害」の転倒転落防止への効果

小山内 美智子, 北川 佳奈子, 林 達哉, 平田 哲

先取り介入の推進による患者特性「高次機能・感覚系障害」の転倒転落防止への効果

医療安全管理部 ○小山内美智子、北川佳奈子、林 達哉、平田 哲

【背景と目的】昨年本学会にてA病院における過去5年間の転倒転落事例を、高草木らが述べている歩行と転倒のメカニズムに關与する「筋骨格系・感覚系障害」「高次機能・感覚系障害」「障害なし」の障害別に患者特性を分類し、予防策の方向性の検討結果を報告した。

「筋骨格系・感覚系障害」は、現行の安全対応の強化で減少が期待でき、一方「高次機能・感覚系障害」では現行の種々のアラーム対応の強化では減少を期待できなく、予測しえない行動の中の先取り介入を実践する事が重要との方向性が見えたと報告した。そこで先取り介入を促す取り組みを行い「高次機能・感覚系障害」の減少傾向が見えたので報告する。

【用語の定義】

高次機能障害；記憶・注意・遂行機能・社会的行動などの認知障害

先取り介入：履物・トイレアセスメント・環境整備など転倒予防の先取りをする事

【取り組み】1. 先取り介入の推進 平成26年4月と7月：RM全体会議にて危険予知行動と先取り介入の意義と有効性を説明。8月～12月：転倒転落事例の報告部署訪問をタイムリーに行い先取り介入の実施状況の評価。11月：予防ポスター作成、周知。毎月：安全関連会議にて事例

を示し情報発信と先取り介入の実践を促す。

2. 平成26年度転倒転落事例の患者特性15項目を障害別に分類し「高次機能、感覚系障害」の件数を平成25年度と比較し、更に平成26年度を3ヵ月毎の推移から先取り介入の効果を評価する。

【結果と考按】

転倒転落発生件数は過去6年間で34%減少、平成25年度と26年度では14%減少。

転倒転落事例の患者特性「高次機能、感覚系障害」の割合でも平成25年度から26年度では14%減少していた。平成26年度を3ヵ月毎の推移で見ると12月までは減少し後半やや増加していた。

以上より履物・トイレアセスメント等から行動の先取り介入をする事で「高次機能・感覚系障害」が誘因となる転倒転落防止への有効性を確認できた。先取り介入の推進での事例発生時タイムリーな部署訪問は、正確な情報を得る事、部署の特殊性・困難さを話し合う事で問題・課題を明確にする事に繋がる。タイミングを見失わう事なく細やかな関わりにより転倒転落予防への意識の向上に關与することを実感し今後も継続していきたい。